

コロナウイルス文献情報とコメント(拡散自由)

2022年11月28日

BMJ:戦争に夢中になっているロシアでは、感染の波を一つやり過ごしたようだ。
だが次の波の備えはしていないようだ

【松崎雑感】

国民から収められた税金の使い道で、最もその国が富む使い道は、「医療福祉教育」です。この分野にお金を使えば、国民が健康になって、教育レベルも上がり、国の生産力が向上するからです。一番無駄な使い道は「軍事費」だというのが常識です。戦国時代なら、戦争で領土を拡張すると、年貢がたくさん入るため勝った殿様の国はよかったです。現代の戦争は、数十兆円の費用を投入して超大規模な花火大会を行い、花火の暴発で数十万人の見物客（国民）が亡くなるという事に等しいのです。問題はロシアだけではありません。国と国の間のもめ事をミサイルや核兵器の数の競争で決着を付けようとするかの国の政治家たちの主張は、実に問題があります。コロナ対策では、政治の姿勢が試されます。

戦争に夢中になっているロシアでは、感染の波を一つやり過ごしたようだ。だが次の波の備えはしていないようだ

Loseva P. Preoccupied with the war, Russia skipped one wave of covid and ignored another. *BMJ*. 2022;379:o2825. Published 2022 Nov 25.
doi:10.1136/bmj.o2825

ロシアはコロナを忘れてしまった。しかしウイルスはロシアを忘れていない

ロシアはこのパンデミックにどのような対応をしているのか？今年2月にロシアは、感染者が20万人以上という過去最高のオミクロン株感染の波を経験した。昨年初めのアルファ株ではわずか3万人の感染者だった。

イギリス政府は2月24日に感染者の自己隔離ルールを緩和したが、その日にロシアはウクライナ侵略を始めた。ロシア政府はコロナ対策をすっかり忘れて戦争に夢中になっている。

その後ヨーロッパには2波以上のオミクロン流行が起きた。ロシア政府は戦争を進め国民の不満をなだめることに集中してきたが、コロナ対策はどうなったか？この期間にロシアには、ヨーロッパ地域で起きたオミクロン流行の波が起きなかったように見える。年末が近づいているが、ロシアのコロナ対策の行方が懸念される。

起きなかった感染の波

今年2月末にロシア政府はパンデミック対策の制限を緩和し始めた。対策緩和は地域が積極的に徐々に行ってきた。例えば、モスクワでは、労働者の在宅ワーク実施率を3割としていたが、解除した。2月28日には、60歳以上の高齢者の自己隔離ルールを緩和した。

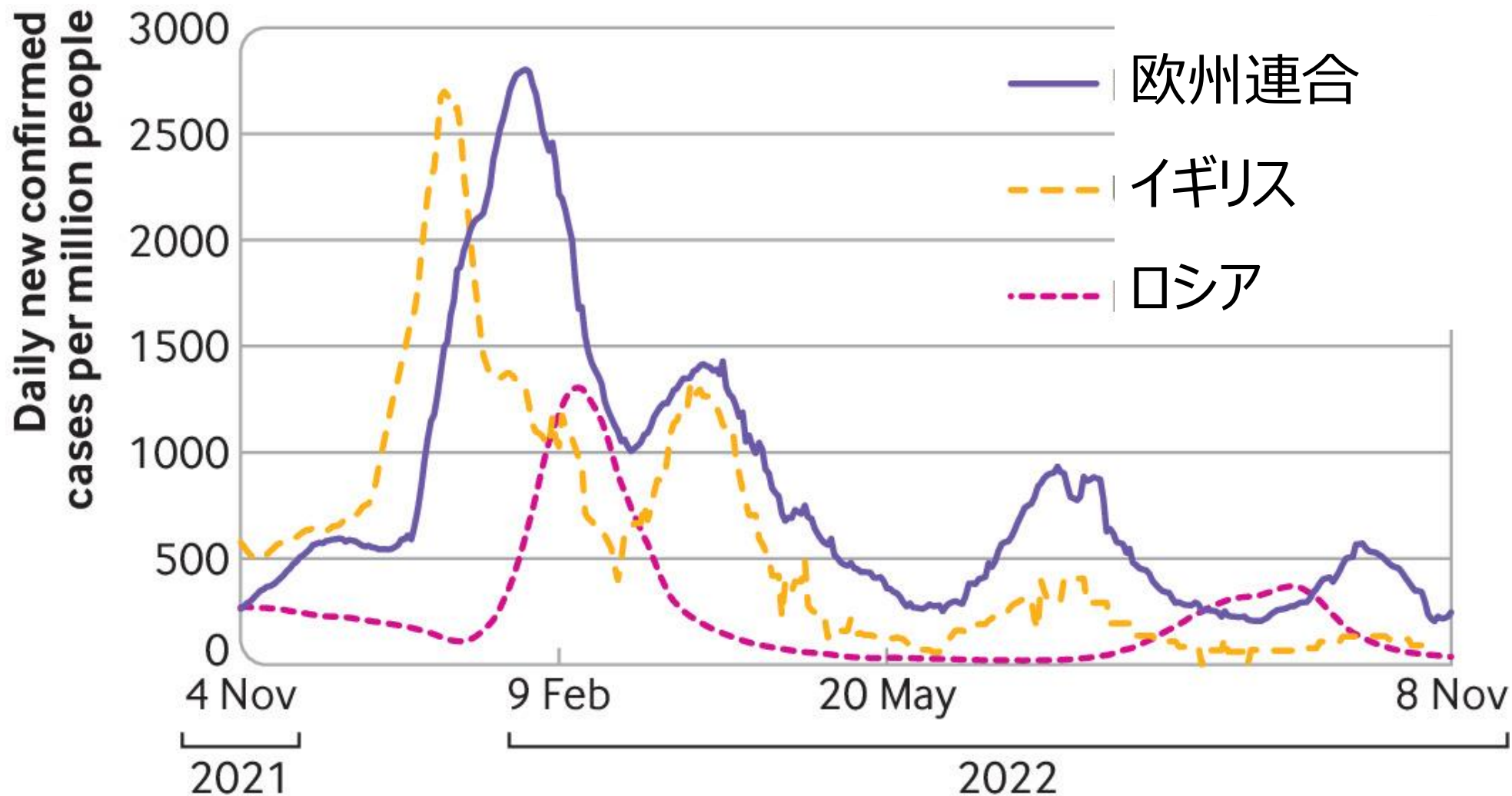
3月中旬には、マスク着用ルールを緩和した。8月までにロシア国内のパンデミックルールがほとんど緩和された。

世論調査でもコロナパンデミックが大きな問題だとする意見は3月の5%から8月の1%に減った。メディアは、コロナが終わったと報道した。

ロシアは欧州よりも1～2か月流行が遅れる。3月の対策緩和後BA.2 オミクロン株が流行したが、4月にはロシアでの流行の波は見られなかった。

ロシアの保健大臣ミハイル・ムラシュコ氏は5月末までにはきっとオミクロンが流行すると警告したが、流行しなかった。この間一日あたり感染者数は4千名以下に減少した。（図1）

1日あたり新型コロナ感染者数（100万人あたり）



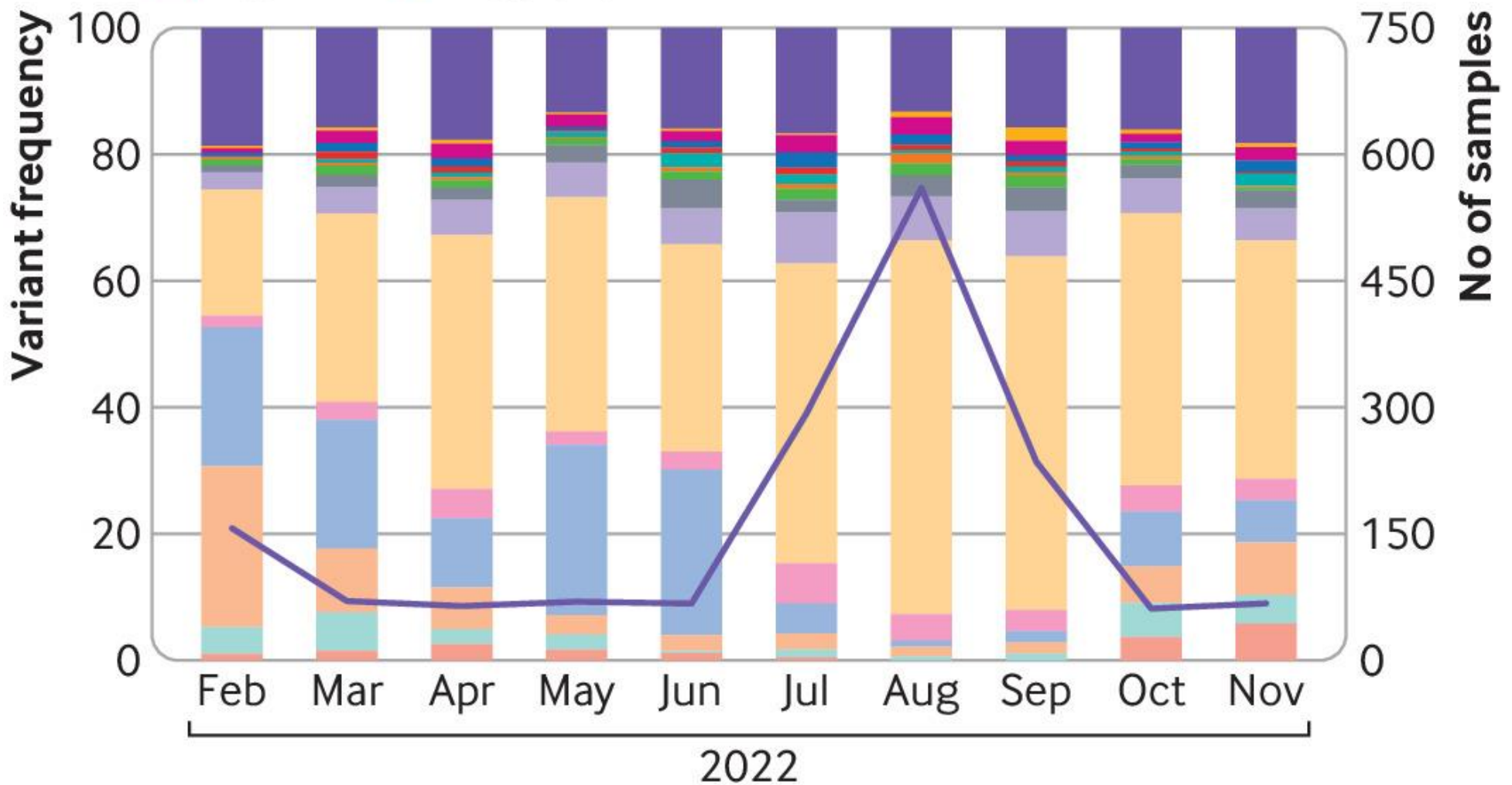
なぜ感染の波が起きなかったのかは不明だ。しかし、人々の密集を避ける対策の緩和がちぐはぐに行われたことで説明できるかもしれない。

例えば9月30日にウクライナの一部をロシアに併合するコンサート式典など多くの人々が集まる文化的イベントは開催されるようになったが、それ以外の政治集会などはコロナ対策のために引き続き禁止されている。10月23日にモスクワ市長府は、政府の暴力とテロの犠牲者を追悼する式典を「新型コロナウイルス感染防止のため」という理由で中止させている。

パンデミック初期から、この7月まで、ロシア政府は、国民の国外旅行を、教育や治療を受けるなどの「特定の目的」を除いて禁止してきた。しかし、ウクライナ戦争により、緩和された国境措置は、実質的に強化されている。航空便もほとんど禁止されてきたこともあり、ロシア国内のコロナ流行抑制がはかられているのかもしれない。

ヨーロッパでオミクロンBA2が流行するまでは、ロシアはコロナの流行の波から遠ざかっていたことになる。ロシア国内の新型コロナウイルス遺伝子配列を調査しているCORGI (Coronavirus Russian Genetics Initiative) consortiumによれば、この2月におけるBA2の流行率は20%だった (図2)。

ロシアで流行している新型コロナ変異株



しかし、BA2の流行の波が、最初のオミクロン株の流行のすそ野と重なってしまったため、隠れてしまった可能性の方が強いかもしれない。遺伝子解析専門家のドミトリー・プルス氏は、多くのロシア国民がBA1に感染したばかりのタイミングだったため、BA2に対するある程度の免疫が形成されていたので、大きな流行にならなかったのかもしれないと述べている。彼は本誌に、この現象はデンマークでも観察されており、良く起こることだと語った。

無視された感染の波

6月にヨーロッパにオミクロン第三波（BA5）が来た。さすがにこれはロシアにも押し寄せた。国内のBA5率は50%を越え、9月16日にはロシア史上二番目の5万9千人の感染者となった。

しかしロシア政府はこの状況は無視した。ロシア連邦保健消費者権利庁は、10万人あたりの感染者数が50名を超えた場合、マスク着用を義務化するとだけの方針を出した。この方針に従わない地域も多かった。感染者数が基準を超えたモスクワやセントペテルブルグでマスク着用が強化されることはなかった。

患者の増加したところに、プーチン大統領が出したのは部分動員令だった。2日間で数千人が前線に送られた、新たな感染防止対策は行われなかった。

ワクチン未接種の新兵には、接種が義務付けられていた。ロシアのスプートニクワクチンは不評で、国民の47%が未接種のままだった。驚いたことに新兵に接種されるワクチンのリストにはスプートニクワクチンが収載されていなかった。幸運にもワクチンを受けられても、すぐに前線に送られたために、抗体レベルが増加するまでの1か月の猶予など与えられなかった。

4月以降、前線における新型コロナ感染率の公式データは公表されていない。しかし、前線基地で招集された兵士が、多くの同僚が病気になっている証言するビデオが拡散されている。発熱、咳、嗅覚味覚障害などオミクロン株と言うよりも、従来株のコロナの典型的症状が多いという。

戦争しながら、コロナとともに生きる

この原稿執筆中、まともな対策が行われないにもかかわらず、ロシアのコロナ感染数は徐々に減少している。BA5の流行も峠を越えた。これはヨーロッパの他の国々でも同様に生じている傾向である。積極的な感染対策がないにもかかわらず感染が減少している国が多い。ただし、イギリスでは、高いワクチン接種率とサーベイランスの継続に支えられて「コロナとともに生きる」という政策が続けられている。これらの点がロシアには欠けている。

最初のオミクロン流行時までにはイギリス国民の70%以上がワクチンを完了している。一方、同じ時期ロシアでは50%以下であり、10月でも60%に達せず、ブースター接種を受けた者も12%に過ぎない。

この間、ロシア国内のワクチン供給は激減した。スプートニクワクチンだけが入手可能となった。

ロシア政府からの発注がないため、EpiVacCorona とCoviVacの国内生産は夏までに停止した。海外からのワクチン輸入も承認されていない。

既存ワクチンの改良も許可されていない。ファイザー社やモデルナ社にならい、ロシアのガマレヤ社もオミクロン向けスプートニクワクチンを製造したが、政府から認可されていない。

さらに、政府がワクチン接種を勧奨しないため、国民のワクチン接種意欲もわいていない。（図3）

ロシアの週あたりワクチン接種数（10万人あたり）



ロシア国内の新型コロナウイルスも激減した。これは主に官僚主義的な遅延によるものとサーベイランスを主導するアンドレイ・コミサロフ氏は「政府は遺伝子解析のための予算を支給したが、試薬の購入に時間がかかり、解析ができなかった」と語った。

ただし、夏の終わりまでにこの状況は改善された。公式発表では、BA5により9千人が死亡したとされる。実際にはもっと多いだろう。

ロシアの独立系研究者は1万5千～2万5千人と推定している。これはイギリスのBA5による死亡者（ロシア防衛相は6千人、ウクライナ防衛相は5万4千人と推定）を3～5倍上回り、ウクライナでの戦死したロシア兵の数に匹敵する。

そうこうしているうちに、ヨーロッパには新たな波が押し寄せている。新たなオミクロン派生株BF7、BQ1、BQ1.1がロシア国内でも発見されている。

ロシア政府はこの事実を無視するのだろうか、それが問題だ。